

## 「チャレンジ ―私と仕事―」

三木 啓子

「配属は中南米営業部」。上司の言葉を聞いて、私は嬉しさのあまり思わず小躍りした。大学で学んだスペイン語をいかして、中南米地域の貿易の仕事をしたいと強く願っていたからだ。1982年4月。こうして私は希望に燃えて、大阪市内の貿易会社で仕事への第一歩を踏み出した。その時、奇妙な現象に気がついた。1週間の接遇研修を終えて配属されたのは女性社員のみ。一緒に入社した大勢の男性社員の姿が見えない。何と彼らにはさらに半年間の研修が待っていた。工場での商品の製造や販売店での営業など、これからの実務に備えてさらに質の高い研修を受けるのだった。しかも彼らは年齢や学歴に関わらず「事務職」であり、女性社員は全員「補助事務職」なのだ。女性の業務はあくまでも男性の補助でしかなく、しかも賃金や昇格にも大きな較差があった。また当時女性は数年で結婚退職をするのが慣習でもあった。

入社3年目に私は結婚した。「夫に依存した生き方をしたくない」という思いと「働くことに女性と男性の区別はない」という考えから退職せずにそのまま仕事を続けた。その後まもなく出産。結婚後も働き続ける女性が少し増え始めてはいたが、彼女たちも妊娠中に退職しており、社内で始めての産休取得となった。8週間の産後休暇を終えて職場復帰したものの、やはり仕事と育児との両立は予想以上に厳しいものであった。私にとっては「働くこと」と「子育てすること」はどちらも大切なことであり、仕事も、家事も、育児も、地域活動も、全てが自分自身を形成するものだと思っていた。しかし、体力的にも精神的にも非常に辛い日々であったことは否めない。どうして女性だけがこんなにしんどい思いをしなければならないのだろうか。「スーパーウーマン」のような女性だけしか仕事と育児の両立はできないのだろうか。否、誰でも性別に関係なく、自分らしく生きる権利はあるはずだと思う日々が続いていた。私は仕事中に張ってくるお乳を会社のトイレで搾り、便器に捨てながら「女性が、結婚しても出産しても、仕事と家事育児を両立しながら、仕事にやりがいを持って、いきいきと働ける会社を作りたい」という思いを強めていった。

その後数回の転職をしながら、次男を出産。相変わらず仕事と育児に忙殺される日々を過ごしていた。そんな時、ある自治体の女性センターが非常勤職員を募集しているのを知った。その女性センターの講座を何度か受講したこともあり、「女性が仕事と育児の両立ができるような講座を企画したい」との思いから応募し、採用されることとなった。そこで私は「ジェンダー」と出会った。そして、今まで私が「生きにくい」と感じていたことは、決して自分自身が悪いのではなく、社会の構造と性別役割分業に根ざした考え方によるものだと知った。ではそんな社会構造をどうすれば変えることができるのだろうか。そのためには、女性自身ももっと力をつけることがとても重要だということを学び取った。私は女性のための講座や講演会を無我夢中で企画した。それはとてもやりがいのある仕事であった。

そして今、私は女性がさらにエンパワメントできる事業を展開したいと思い、自分の会社を立ち上げた。誰もが自分らしく暮らせる社会を築くために、そして性別に関係なく自分の人生は自分で選択できる社会を築くために、私の新しいチャレンジが今始まろうとしている。もちろん私一人だけのチャレンジではない。今まで同様、大勢の女性たちと一緒に、力強く、そして確実に変革をめざして取り組んでいきたい。